

超高齢化社会

別紙「今、私がお葬式に関して思うこと」

- ◆ターミナルケア(終末期医療及び介護のことです。予想される余命が3ヶ月以内程度で表現されることがありますが、終末期という言葉自体は公的に明確な定義がなされていないわけではありません。)
- ◆ホスピス(ターミナルケアを専門に行う医療施設のことです。介護保険が適用される施設として、特別養護老人ホームがあります。)
- ◆尊厳死(人間が人間としての尊厳を保って死に臨むことです。第三者の意思が介在するのが「安楽死」、本人の意思に基づくのが「尊厳死」です。事前に延命行為の是非に関して宣言するリビング・ウィルが有効な手段とされる一方、尊厳死という名のもとに、殺人や自殺補助が一般化する可能性も指摘されています。)
- ◆脳死と臓器移植(脳死とは脳の機能が停止し、回復の見込みがなく、生命維持装置をつけていても間もなく死を迎える状態で、現在の法律では臓器移植をするときに限って、この状態を「人の死」と認めています。)
- ◆高額な医療費(高齢化が必ずしも医療費高騰の一番の原因ではないようです。医療技術の進歩が、患者が死亡するまで高度な医療を提供できるという環境の整備につながった結果、医療費の高騰を招きました。)
- ◆高額な葬儀費用
- ◆独居老人(「無縁社会」・「孤独死」・「無縁墓」)

- ◆高齢化の急速な進行と少子化(1990年台に入り急速な少子高齢化が始まり、2005年には人口の減少が始まりました。)
- ◆高齢者(65歳～74歳前期高齢者・75歳以上後期高齢者)
- ◆超高齢社会(65歳以上の高齢者の占める割合が全人口の21%を超えた社会)
- ◆高齢化率(2010年日本の高齢化率23.02% / 神奈川県の高齢化率 20.1%)
- ◆高齢世帯の割合(神奈川県:2010年27.6% / 2035年38.3%)
- ◆高齢世帯に占める一人暮らしの割合(神奈川県:2035年37.3%)
- ※1. 相模原市の場合(2010年国勢調査) ・人口717,544人
(出生6,036人 / 死亡4,780人 / 平均寿命は男性が80.5歳、女性は86.9歳です。)
・65歳以上の高齢者138,094人(高齢化率19.24% / 100歳以上161人)
・世帯数302,815世帯 ・高齢世帯数は55,702世帯(18.39%)
・高齢者夫婦の世帯数は27,857世帯(9.19%)
・高齢者単身世帯数21,133世帯(6.97%)
- ※2. 厚生労働省 国立社会保障・人口問題研究所の発表(2014年4月11日)
世帯数の将来推計にれば、
『世帯主が65歳以上の高齢世帯は2035年に40.8%と初めて4割を超え、全ての世帯の3分の1以上が一人暮らしになる』と予測しています。

タブーの崩壊

- ◆『お葬式』(1984年公開・伊丹十三監督作品。
これまで厳粛な儀式であったお葬式を初めて取り上げた作品です。
初めて出すお葬式に右往左往する家族と、周囲の人びとの姿がコミカルに描かれ、タイトルにもかかわらず中には笑いが溢れており、そのギャップが大きな話題を呼びました。
公開当初は縁起でもない題材のため誰も期待はしていませんでしたが、驚異的な大ヒットとなり日本アカデミー賞を始め日本映画の各賞を総なめに致しました。
- ◆『大往生』(永六輔氏著1994年3月初刊。全国を旅するなか、各地の様々な人々から聞いた「老」「病」「死」についての言葉を集めたエッセイ集で200万部の大ベストセラー。その後、テレビのワイドショーや新聞・ラジオ等のマスコミに多数取り上げられました。1996年4月にはNHKが森繁久彌氏主演で放映、以後お茶の間で普通に「老・病・死」が語られるようになりました。)
- ◆『おくりびと』(2008年公開・滝田洋二郎監督作品。俳優の本木雅弘氏が1996年青木新門氏著『納棺夫日記』を読み感銘、映画化の許可を得ましたが脚本の内容と折り合いがつかず原作とは全く別の作品『おくりびと』として映画化された作品となりました。しかし、映画は大ヒットを記録、日本アカデミー賞を始め映画の各賞を総なめし、さらに、翌年の2009年2月には、第81回アカデミー賞の外国語映画賞を受賞。)
- ◆『お葬式は、要らない』(島田裕巳氏著2010年1月初刊。2010年度の年間ベスト3に入るベストセラーを記録し、葬儀業界を始め仏教界にまで話題が広がりました。
著者の島田裕巳氏は、現在「葬送の自由をすすめる会」の二代目会長を務めております。)

火葬のみ = 直葬

- ◆高度経済成長と核家族化(明治以降、工業化が進み都市化が始まります。急速な住民の流動化が起こり、大家族制度は崩壊。戦後、新たな時代の考え方として「家」制度から「個人」への自立が叫ばれ核家族化は進行了。それぞれのマイホームごとに家電などの消費は拡大し、その結果として地縁・血縁は急速に崩壊しました。)
- ◆コミュニティの衰退(一定の自治や風俗・習慣などの社会的特徴をもった地域的範囲の上に成立している生活共同体・地域社会のことをコミュニティと呼び、自治会や町内会などがあります。核家族化によって人との関わりが減少した結果、地域生活共同体への参加意識が低下しました。また、人や物の流動化が進んだ結果、大型ショッピングモール化によって商店街の消失が起っている地域も少なくありません。かつて地域が担ってきた冠婚葬祭や福祉、あるいは災害時の復興などの相互扶助のありかた。さらには、その地域独自の文化や伝統の継承も消えかけています。コミュニティの衰退は地域に孤立する人を増す要因となっています。)
- ◆価値観の多様化(何が大事で何が大事でないかという判断、ものごとの優先順位づけのことです。人が描く価値観は「ライフスタイルの変化」や「生き様」となって現れます。)
- ◆バブル崩壊(1991年3月から1993年10月までの景気後退期を指します。
バブル期とは、1986年12月から1991年2月までの51ヶ月間を指すのが通説です。)
- ◆派手な葬儀の自粛(「家族葬」の登場)
- ◆高額な葬儀費用への反発
- ◆葬式仏教への反発

社会の変化

ウェル・しおん 中村 清貴 2014.07